第 10 回市史講座ミニレポート：平成 28 年 1 月 21 日（土）

「松江市域の自由民権運動・松江出身の民権家とその時代ー「忘れられた民権家」旧松江藩士・高橋基一の経歴・活動とその民権論ー」

講師：竹永三男先生（島根大学名誉教授・松江市史編集委員会近現代専門部会）

松江市域の自由民権運動については、内藤正中先生や内田融先生による先行研究がありほぼ明らかにされてきました。しかし、松江出身で、のちに東京でジャーナリストとして活躍した高橋基一については、あまり知られていません。『松江市史』近現代編では「松江の外の松江」と題し、市外・県外で活動した市域出身者について取り上げる予定ですが、今回はその中のひとり、「忘れられた民権家」高橋基一について、詳しくお話しして頂きました。

自由民権運動とは、板垣退助らによる「民撰議員設立建白書」に端を発した、人々の人権・自由を主張し国会開設・憲法制定を要求した運動です。

高橋基一は松江藩士の家に生まれ、12 代藩主・松平定安の侍臣となり、版籍奉還後は定安と藩政改革に着手するなど、松江藩政に深く関わった人物でした。東京へ移転後は「朝野新聞」の記者となり、自由党が結成されると党員として活動しました。記者としての仕事のほか、アメリカ合衆国史やビクトル・ユーゴー伝の翻訳、東京府会議員、全国遊説、国会早期開設の請願など、様々な活動をしました。

高橋基一の主張は「朝野新聞」の論説によく示されており、西南戦争の取材、専制政治の批判、自由論、海軍拡張の批判、貴族の廃止、琉球処分の主張など広範囲にわたるもので、歴史的知識や統計を駆使した具体的論述を特徴とするものでした。

憲法をめぐる問題を抱えた今、高橋基一の民権論を取り上げることで、この時代の人々の対応や国会・憲法について今一度振り返ることができ、自由民権運動の歴史を継承していくことができます。そして最後に、『松江市史』編纂事業は多くの史料保存機関からの史料収集と分析・研究の積み重ねが必要であり、それを支える専門職員と利用者・史料提供者である住民（市民・県民・国民）で成り立つことをお話しされました。